

意地

お茶の水女子大学4年
安部友里恵
小林説子

参考文献



「意地」の構造
山野保 創元社 (1990)

山野保(1926～)
(1951)高松家庭裁判所調査官

著作
「未練」の心理 創元社
古典に表れた日本人の嫉妬 千葉出版

意地

- 1 気だて。心根。根性。
- 2 自分の思うことを無理に押し通そうとする心。

- 3 物をむやみにほしがめる気持ち。
特に、食べ物に執着する心。
- 4 句作上の心の働き。

「デジタル大辞泉」より

意地の分類

～主体のあり方から～

1. 自覚的

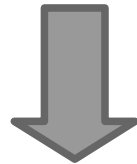
- ・・・自分が何かにつき誰に対して意地になっているか自覚している

2. 無自覚的

1. ①自我理想に関わる

自分の中に理想的自己像を描き、現実の自分をそれに近づけようとする願望をもち、強い意志を持って努力するタイプがいる

「～であるべき自分」という自己像に加え、
「～と思っているであろう世間」を意識する

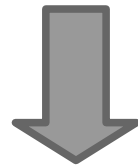


「～でない不甲斐ない人間」だと世間から思われる恥辱から逃れるためにがんばらなくてはならなくなる

1. ②世間に関わる

人が社会で適応していくためには社会全体の決まりを守るだけでなく、所属集団がもつ共通認識との間で不協和音をたてないことが必要

所属集団の認識が個人に「～らしさ」を求めるとき、それに反する個人は「～らしからぬ」というレッテルを張られ非難される



「～らしい」ことを示すためにがんばらなくてはならなくなる

1. ③特定個人に対する

対人関係の葛藤から生じる意地

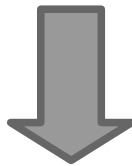
親密な人との間で葛藤が生じた時、理想と現実の板挟みに

他者に指摘されると恥辱を感じる

このような事態に陥れた相手を憎み、
防げなかった自分を不甲斐ないと思う

+

世間の目を意識せざるを得ない状況



正義に基づき正当な権利を主張したくなる

意地の分類

～主体のあり方から～

1. ①自我理想に関わる
②世間に関わる
③特定個人に対する
2. 無自覚的

意地の起源～歴史～

「意地」 仏典:俱舍論

…「意志」に近い概念

「たてたてし」 源氏物語

…気が強い、才気がある

「心いちに」 大鏡

…非常の心

「意地」 …連歌を生み出す根源の芸術精神

「意地」 日葡辞書

…心根

「意気地」 色道大鑑

…張り合い負けまいとする気力

「意地」 武道伝来記/井原西鶴 …内在的意地

近松門左衛門: 内在的意地と世間的意地を分化

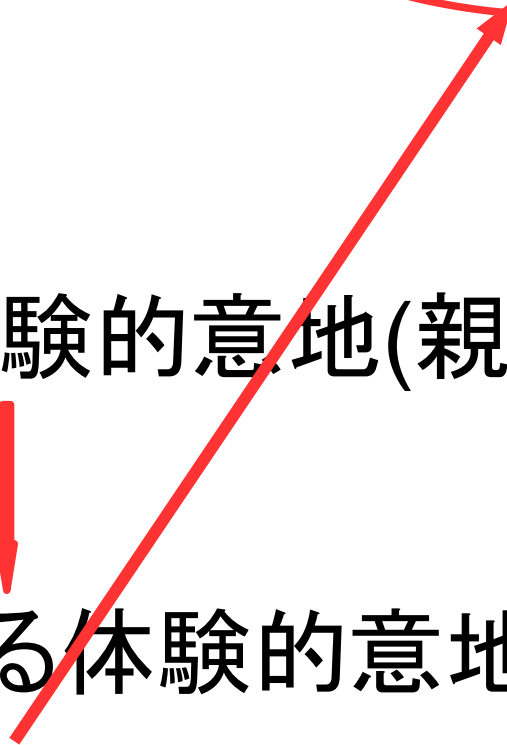
江戸後期には今の意味の「意地」が成立

意地の起源～個人の成長～

自分が共感しうる意地には**固有のゾーン**がある

幼児期の原始体験的意地(親への反抗)

第二次反抗期における体験的意地(権威への反抗)



意地の基本的性格特徴

意地は様々な側面を持つが、意地である以上、これだけは備えておかなければならない性格特徴がある。

意地の基本的性格特徴

1.(名誉心)

自分の名誉を保持しようとする気持ちを強く持ち、名誉が傷つけられた時は何としても回復しようとする心

2.(対抗心)

強者から圧迫を加えられた時、これに対して自己主張を貫こうとする心

3.(我意)

他と張り合ってあくまでも我意を通そうとする心

意地の基本的性格特徴

これらのどれかが顕在化し、どれかが潜在化することはあっても、必ず3つすべてが具わっていなければ意地は成立しない。

名誉心

自己主張 + 「名誉心」 → 意地

名誉…自我理想に相応しい自分であることへの
内面的品位の意識

名声…名誉ある評判
その名が広く知られることが必要

正確には「名声の要素がつよい名誉」

名誉心

「名誉」の損傷

＝世間に対して面目を失い、1人前の人間として世に立つことができなくなる(屈辱)



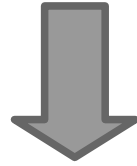
意地とは「名誉」の損傷によってうける屈辱を、自らの行為によって雪辱し、その「名誉」を保持しようとする心である。

- ・名声の要素が強すぎる
- ・行き過ぎて独善的である
- ・名誉心と意地の間に葛藤がある

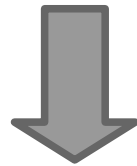
ネガティブな評価を受ける

対抗心

強者から圧迫を受ける



「このまま屈伏してたまるか！」(対抗心)



強者に立ち向かう

(弱い心に鞭打って、心ならずも立ち向かわざるを得ない)

意地

玉砕覚悟の潔さと爽やかさが
見られる意地は、
ポジティブな評価を受ける

我意を通そうとする心

意志

↑ 自分を理想へ近づけようと決意する

我意を通そうとする心

↑ 理想に達しえない不甲斐ない奴だと世間から嘲笑されていると思い、何が何でもやり遂げてみせると決意

意地
(根本的素材)

他者の主張や存在を否定しない限りでは
ポジティブな評価を受ける

意地の発生と劣等感

3つの特性を結びつけるものは？

劣等感コンプレックス

意地の発生と劣等感

人が意地を張るのは、彼が何らかの意味で弱者だから。
弱者が意地を張るのは、世間の目がある中で傷けられた
自己を回復できないときである。

▶ 劣等感を刺激される

劣等感…他者と比較して自分が劣っていると意識する
「引け目」の感情

意地の発生と劣等感

劣等感コンプレックス

→劣っていることを辛く感じている

→本当は優れた自分でいたい

→常にその劣等感を克服しようとする欲求を秘める

→**意地の発生に深く関わる**

一方、劣等感を刺激されると、精神的に参ってしまう人も。

(無力的になる)

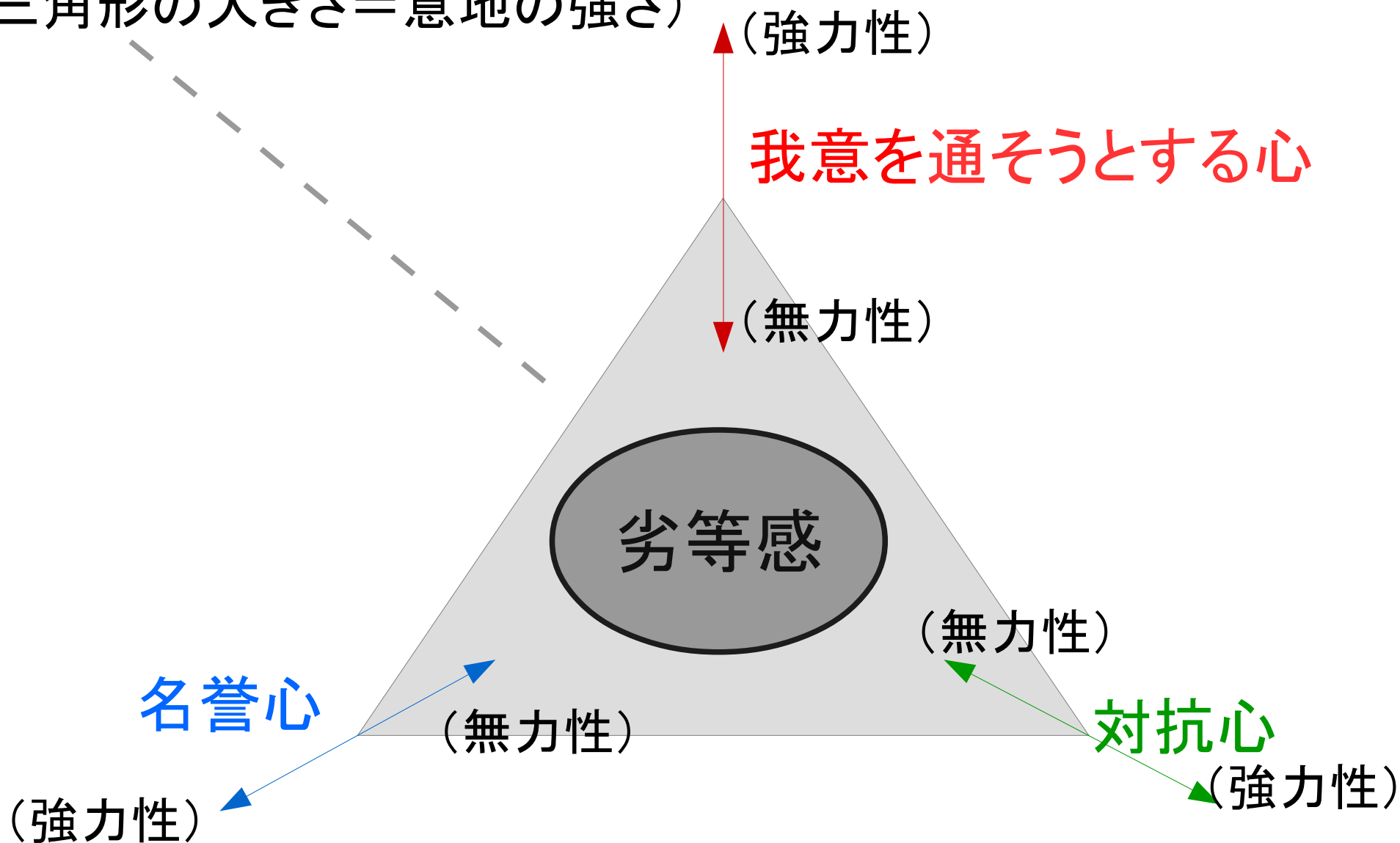
→「どうせ私はクズですよ」(ひがむ、すねる)

…意気地なし

意地の発生と劣等感

意地

(三角形の大きさ=意地の強さ)



意地の発生と劣等感 ～強力性と無力性の関係～

強力性と弱力性は反対の心性ではない

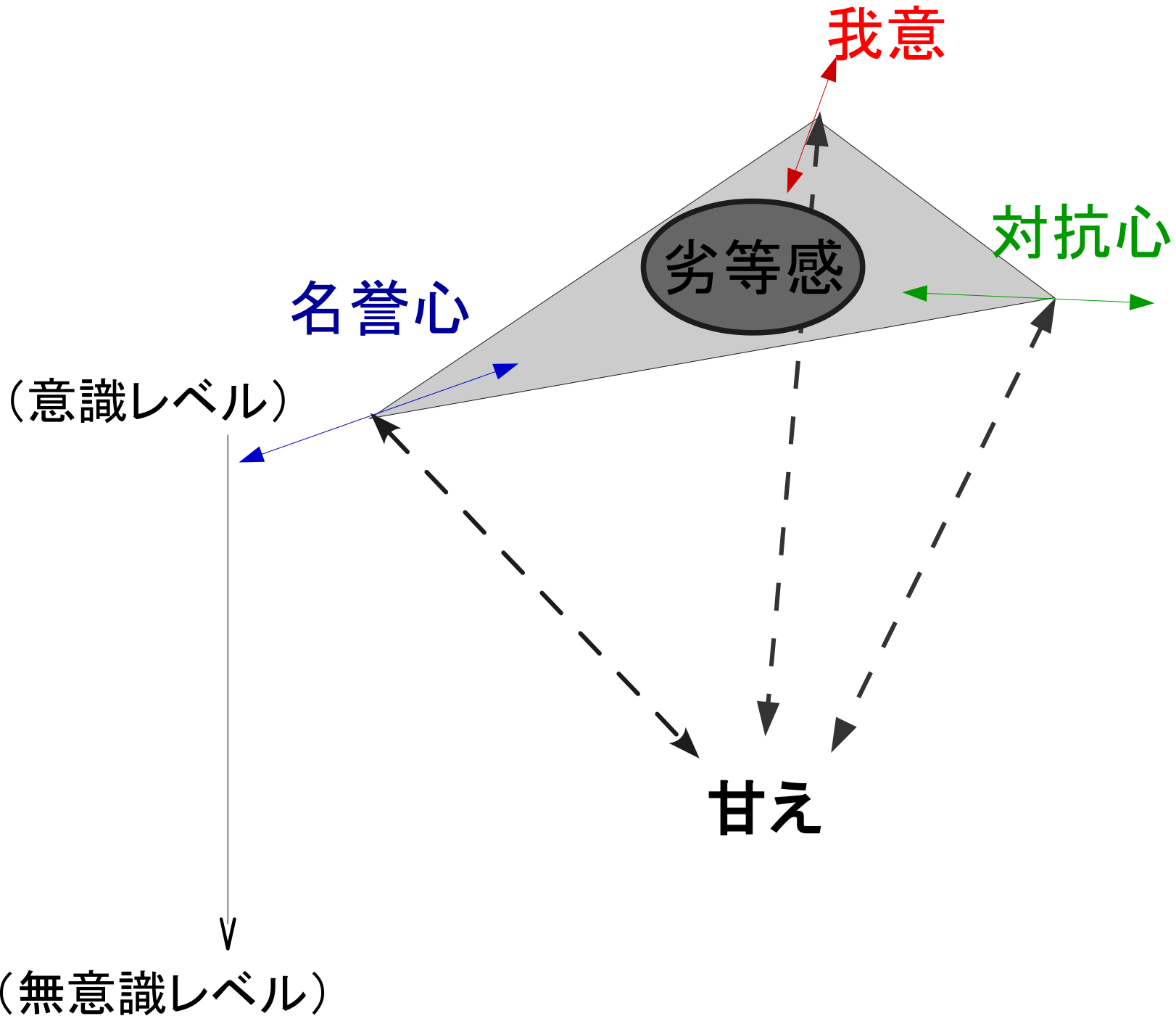
「どうせできない」と思いつつも、「やらなきゃ」と感じる

「やる！」と思いつつ、ふと「どうせできない」と感じる

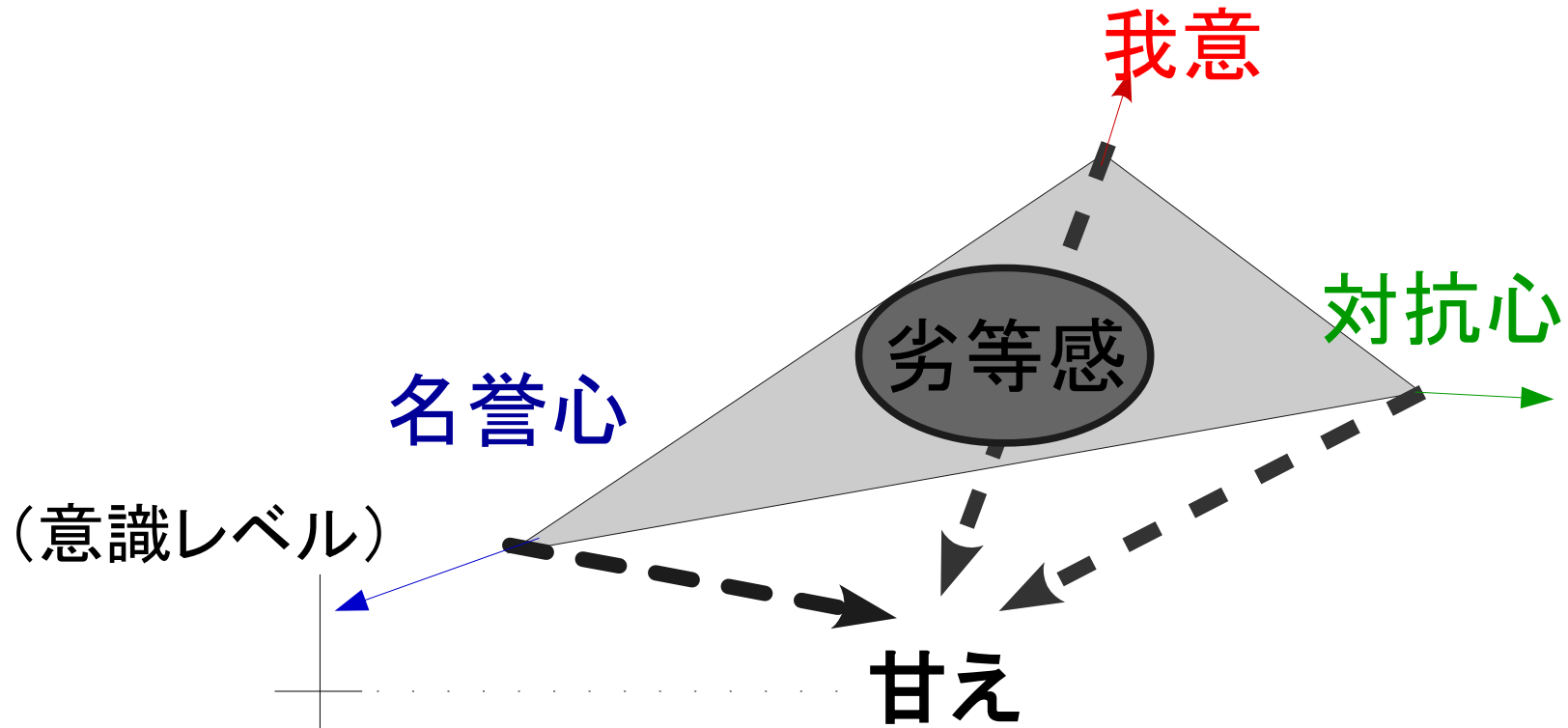
→ さらに意地を張る

甘え(相手への期待)が関係している

意地の発生と劣等感 ～強力性と無力性の関係～

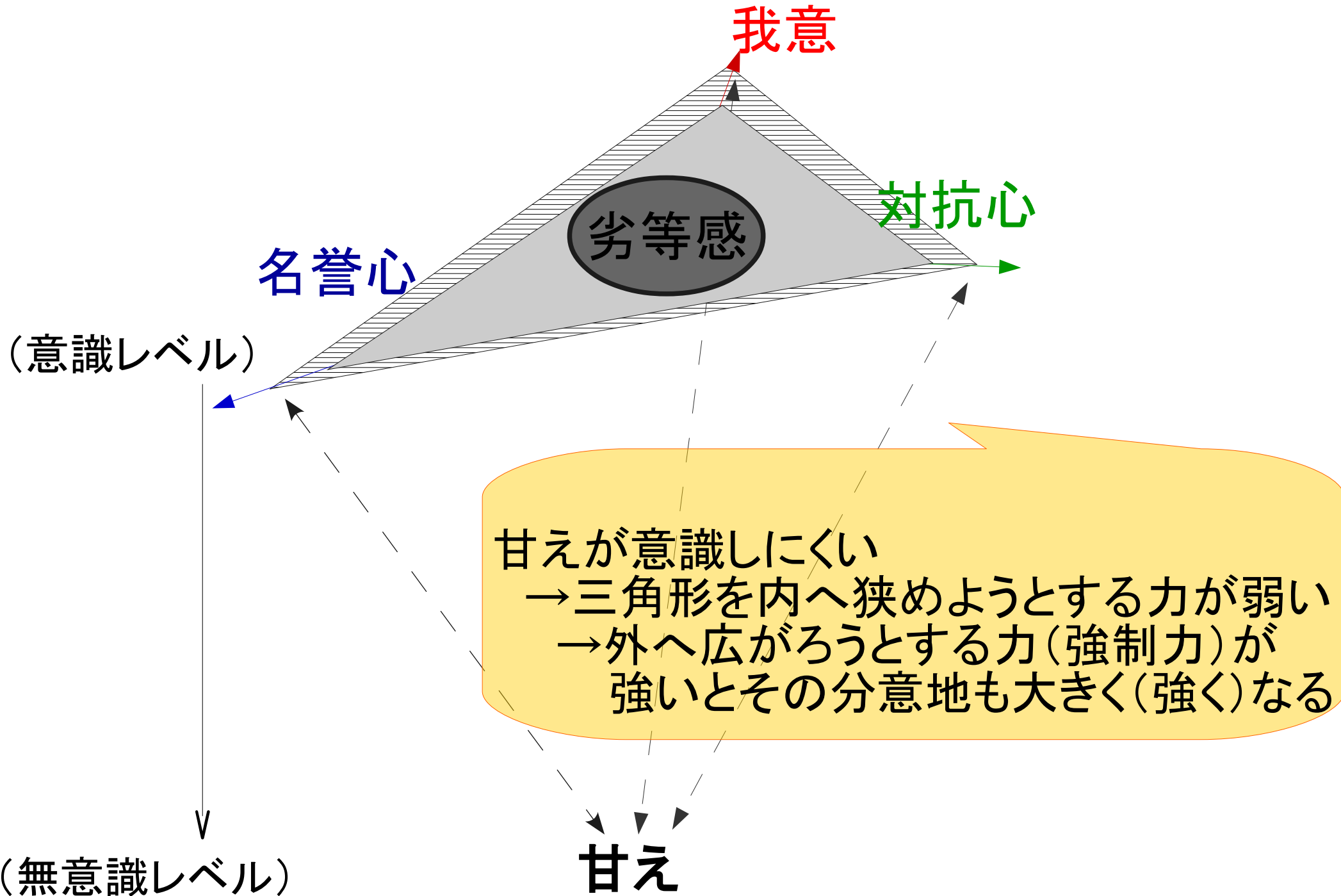


意地の発生と劣等感 ～強力性と無力性の関係～



甘えが意識しやすい
→ 三角形を内へ狭めようとする力が強い
→ 外へ広がろうとする力(強制力)が
強くても意地は破たんしやすい

意地の発生と劣等感 ～強力性と無力性の関係～



意地と類縁語

意気・心意気…「名誉心」優位な意地

片意地・依怙地…いきすぎた、醜い意地

根性…意地より意志強固に近い

強情…意地っ張り

諦め…意地の対立概念

(ただし、1対1対応ではない)

江戸期の美意識としての意地

①武士の意地

②江戸っ子の意地

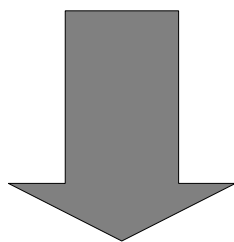
③「いき」

①武士の意地

「名誉心」優位の意地

近世以前の武士

…主君へ忠義より自己の武勇と名誉を重んじた



幕藩体制に伴い、自己犠牲を伴う主君への恭順が、武士の本質に。

また、武勇より領国経営の才能が求められた。

武士の意地

庶民の間では・・・

武士の意地は、思慮分別の外にあり死をも辞さない
気概をみせるとき、共感され称賛された

武士の意地

= 立身出世や金銭万能の打算に長けた俗物性と、
真っ向から対峙するヒーローを待望する民衆によって
美化された武士像

= 現代社会で美化され愛される意地のルーツ

②江戸っ子の意地

「対抗心」優位の意地

江戸

人口の半分以上が武士・神官・僧侶

武家地:寺社:町家=6:2:2

庶民層は支配層の
圧迫化にあった

男伊達 を 庶民の代弁者として美化

日々小権力に対抗して生きる現代人が共感できる

③いき

「いき」・・・垢抜けして、張りのある、色っぽさ
(「『いき』の構造」 九鬼周造)

「いき」を信条とする、深川の辰巳芸者
・・・吉原に対する、岡場所の意地
公娼に対する、私娼の意地

辰巳芸者を描いた人情本には、「名誉心」を強く持ち意地を張る女性が登場する

現代における美意識としての意地

現代社会において、武士や江戸っ子の意地の流れをくむ意地は生活理念として健在である

「いき」はそのままの形では存在しえなくなっている。しかし現代の美意識、生活理念には「いき」の影が見え、現代においてもなおその「いき」には「意地」重要な役割を担っている。